No.378 2023.03.06

京機短信
KEIKI short letter

京機会（京都大学機械系同窓会）　tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp
URL: http://www.keikikai.jp
編集責任者　京機短信編集委員会

目次

・学生と先輩との交流会報告……土屋智由、平山朋子（pp.2-5）
・昔の地図（その7）唐土歴代州郡沿革地圖（中編）……藤川卓爾（pp.6-16）
・The motorcycles which I am loving（1）……河野大輔（pp.17-18）
・京都大学機械系工学教室125周年記念誌発行のお知らせ……西脇眞二（pp.19-22）
・2022年九州支部秋の行事開催のご報告……千々木　亨（p.23）

正法寺の梅と庭園

2月号では吉田神社の節分祭を紹介しましたが、桂キャンパスのすぐ近くには神社やお寺がありません。すこし足をのばしてみれば、東側には鈴虫寺や桂離宮がありますが、ここでは西側にある正法寺（しょうぼうじ）を紹介します。正法寺は京都市西京区大原野にある真言宗東寺派のお寺です。大原野は桂キャンパスの西に位置する、のどかな田園地帯です。正法寺はその奥の高台にあり、庭から京都の一部を展望できます。

撮影：編集人（松原）　撮影日：2022年2月（昨年）

梅はお寺の前に植えられていますが、その枝ぶりや植林の多さはたいへん見ごたえがあります。枝と花の形・色のバランスから花札の梅を思い出しました。この寺は、境内にさまざまな形をした石が配置されているため、”石の寺”と呼ばれているそうです。写真はその庭の一部で、石は鳥獣に見立てられています。また、石の配置と方向により、庭園に「膨張」と「収斂」を与えていると解説されていますが、たしかに庭中央奥に見える京都市内の光景も含めてパースペクティブな動線があるように感じます。市内からやや遠い場所にあるお寺ですが、日本人の美的感覚や世界観を濃縮したような空間があります。

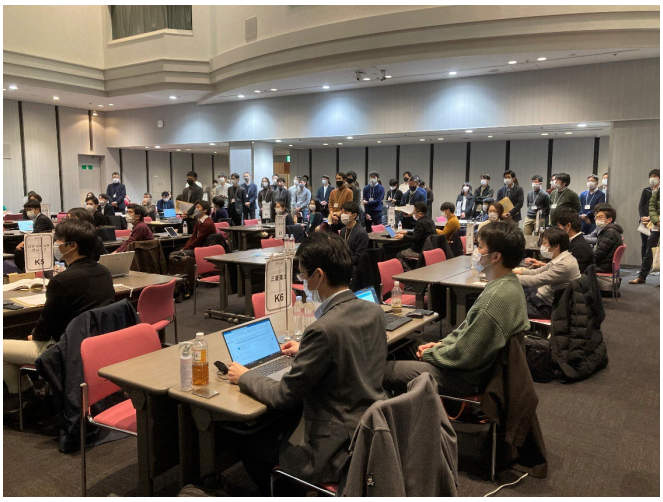
学生と先輩との交流会報告

土屋智由（H3/1991卒）、平山朋子（H9/1997卒）

2023年2月22日（水）、京都リサーチパーク4号館にて、京機会イベントである「学生と先輩との交流会」が開催されました。機械系の卒業生が「先輩」として来られ、現役学生との親交を深めるイベントです。コロナ禍によりここ数年はオンラインで開催してきましたが、今年度は3年ぶりに対面で開催することができました。親交を深めるイベントでありながらも、卒業生は企業を代表して参加下さっている側面もあり、会社の雰囲気や仕事の内容をざっくばらんに聞くことができる貴重な場になっています。今年度は合計76の企業や組織（省庁等）から105名の卒業生（全体の参加者は155名）が駆け付けてくれました。

前日の午後にSMILEメンバーによって会場のセッティングが行われ、当日は9:30過ぎから受付が始まり、卒業生の参加者が来場し、各会社の準備が始まりました。今年度はできるだけ密な状況を避けるべく、会場をB1階と2階の各2部屋ずつ、合計4部屋に分けて開催しました。そして10:40からの事前説明では平方寛之教授による挨拶また、SMILE代表の石田尚之さんによる本日の進行に関する説明の後、11:00より、いよいよ交流会がスタートしました。

平方教授による挨拶の様子



説明会時のバズホールの様子

11:00開始時点では学生の参加はやや少なめで、運営側としては心配もしました

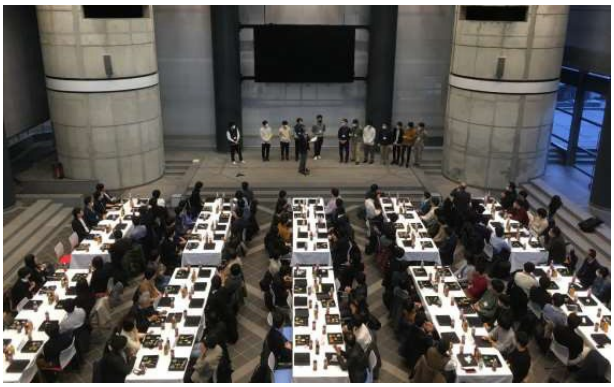
が、午後の時間帯が近づくにつれて少しずつ学生の人数も増え、徐々に熱気を帯びる状況となりました。

各会場の様子

機械系教室から10名以上の教員も駆け付け、久しぶりの卒業生との会話を楽しみました。このような形で会社を背負って参加下さっていることそのものがとても頼もしく思え、会社でご活躍されておられる様子がよく分かりました。最終的な学生の参加人数は約90名で、コロナ禍以前よりはやや少なめなものの、アンケートをみると例年より訪問企業数は多く、参加した学生にとっては実際の会社の様子を知ることができる貴重な機会となったことと思います。

また、17:00より1号館アトリウムに移動して、懇親会を開催しました。懇親会は3年前の対面交流会でも開催できなかったので4年ぶりでした。大学のコロナ対策ガイドラインを考慮して、懇親会はまず机を並べて着席しての会食からスタートしました。各テーブルに学生と卒業生が混ざるようにアレンジされており控えめに会話をしながらお弁当を頂き、交流しました。この間に、SMILEメンバーの

紹介が行われました。30分の食事タイムの後はテーブルを片づけて、マスクを着用しての懇談が行われました。卒業生と学生、教員の間で会話がはずみ、1時間余りの懇談はあっという間に過ぎました。最後に、卒業生代表として徳田貴司さん（2005年卒：㈱Keigan）、教室代表として鈴木基史教授、そしてSMILE代表の石田さんが締めの挨拶をして解散となりました。



食事パートの様子

懇親会パートの様子

締めのご挨拶（左：徳田さん、中：鈴木さん、右：石田さん）

3年ぶりにこのような盛況な会を開催することができ、教員一同、大変嬉しく思っております。お越しくださいました卒業生の皆々様に、あらためまして深く感謝申し上げます。来年度もまた同様の形で、皆様にお会いできますことを心より願っております。

なおこのイベントの企画は全てSMILEによって行われました。会長の石田尚之さん（M2）、そしてメンバーの上田康平さん、田中海斗さん、貴傳名史椰さん、三浦啓輔さん、北田絢也さん（以上M2）、森田健司さん、王原悠真さん、大木幹也さん（以上M1）、上野裕太さん、高橋歩夢さん（以上B4）、ダヤンツルモン ゲルセンツさん（B3）により、本会が開催されましたことを申し添えます。

SMILEメンバー集合写真

当日に参加者へ配布した「企業情報BOOK」

昔の地図（その7）　唐土歴代州郡沿革地圖（中編）

藤川卓爾（S42/1967卒）

４．春秋列國圖

春秋列國圖

Wikipediaによれば、春秋戦国時代については、「紀元前770年に周が都を洛邑（成周）へ移してから、紀元前221年に秦が中国を統一するまでの時代である。この時代の周が東周と称されることから、東周時代と称されることもある。紀元前403年に晋が韓・魏・趙の三国に分裂する前を春秋時代、それ以降を戦国時代と分けることが多い。」とある。

春秋戦国時代の名称は、孔子の『春秋』と劉向の『戦国策』にちなむ。この時代には「諸子百家」と呼ばれる思想家が多数現れた。「諸子」は孔子・老子・荘子・

墨子・孟子・荀子などの人物を指す。「百家」は儒家・道家・墨家・名家・法家などの学派を指す。

また、Wikipediaによれば、春秋については、「『春秋』は、古代中国東周時代の前半（＝春秋時代）の歴史を記した、編年体の歴史書である。一方で、儒教においては単なる歴史書ではなく、孔子が制作に関与した思想書であるとされ、儒教経典（五経または六経）の一つ『春秋経』として重視される。

『春秋』の内容は、王や諸侯の死亡記事、戦争や会盟といった外交記事、および災異説にもとづく日食・地震・洪水・蝗害といった災害記事が主たる内容で、その体裁は、年月日ごとに淡々と書かれた年表あるいは官報のような体裁である。そのような淡々とした記述の背後に、孔子の思想が隠されているとされる。」とある。

春秋戦国時代　～諸国分立の時代～【勢力図・地図・年表】(chugokugo-script.net)によれば、「春秋時代の主要国は、魯・斉・晋・秦・楚・宋・衛・陳・蔡・曹・鄭・燕・呉の13国。」とある。

この地図には「兎貢九州圖」や「周職方氏圖」と同じように「州」の名も□の中に書かれている。東北の方から見ていくと、營州、幽州、并州、青州、兗州、冀州、揚州、豫州、荊州、梁州の十州である。図の左側には□として十一州とある。〇の中に秦とある黄色の部分に「雍州」が書かれていて然るべきだと思うが見当たらない。インターネットで見られる大学や図書館の唐土歴代州郡沿革地圖の資料で見ても「雍州」が書かれていないので、原図からの写し忘れではないと思われる。

列國の名前は列侯として〇で示されている。上記の13国がすべて示されている。その他に隋や唐などずっと後の国の名前が書かれている。

春秋時代には列国同士の争いがあり、その中から「鼎の軽重を問う」や「臥薪嘗胆」などの言葉が生まれた。

「鼎の軽重を問う」は、天下を取りたい楚の荘王が、周の定王をあなどって無礼にも周王室の宝物である九鼎の軽重を問うたという故事に由来する。「鼎」とは、古代中国で煮炊きに用いた三本足の青銅器のことである。

「臥薪嘗胆」は、越との戦いに敗れた呉王夫差が、復讐心を忘れないよう、堅いたきぎの上に寝た（臥薪）、その後、今度は越が呉に敗れ、越王の勾践は恥を忘れないように苦い熊の肝をなめた（嘗胆）ことに由来する。

５．戦國七勇地圖

戦國七勇地圖

序では「戦國七勇圖」であるが、図では「戦國七勇地圖」となっている。図の左下に秦は黄、楚は紅、韓は白、魏は紫、趙は白、齊は黄、燕は赤、周は赤、衛は白、中山は白、夷は白と各国の色分けが書かれている。

Wikipediaによれば、戦国時代については、「春秋時代には国の祭祀を絶つと国の祖先から呪われるという考えから、国を占領しても完全に滅ぼしてしまうことはそれほど多くなく、また滅びても復興することがよくあった。戦国時代に入ると容赦がなくなり、戦争に負けることは国の滅亡に直接繋がった。そのような弱肉強食の世界で次第に7つの大国へ収斂されていった。その7つの国を戦国七雄と呼ぶ。春秋時代には名目的には周王の権威も残っていたが、戦国時代になると七雄の君主がそれぞれ「王」を称するようになり（ただし、楚の君主は以前から王であった）、周王の権威は失われた。

戦国時代初期の諸侯国は数十国あり、その中で斉・晋・楚・越の4国の国力が強く、天下は4分の勢となっている。戦国時代中期には主要な大諸侯國は、韓、趙、魏、楚、燕、斉、秦の7国となった。これを戦国七雄という。」とある。

この七雄は二重の口で示されている。また、州の名前も長円で囲まれて示されている。戦国七雄のうち強大になりつつあった秦と、周辺六ヶ国の外交政策として、「合従」と「連衡」があり、いずれも「諸子百家」のうちの「縦横家」によって考えられた。

当初、六国は相互に結び、協力して秦の圧力を防ごうとした（合従策）。これに対し、秦は個別に同盟関係をもちかけて六国の協力関係を分断することによって合従策を封じた（連衡策）。こうして、最終的に合従策に参加した各国はすべて秦によって亡ぼされ、秦による天下統一が実現することとなった。

司馬遷の「史記」の中の「刺客列伝 荊軻伝」には次の詩がある。

「風蕭蕭兮易水寒 壮士一去兮不復還」。この詩の読み下しは、「風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去りて復た環らず」である。これは燕の太子丹から秦王暗殺を依頼された荊軻が、易水のほとりで見送る者たちに別れを告げる際に作った詩である。この易水の別れの場面は、「史記」の中でも劇的な名場面とされる。荊軻は結局、暗殺に失敗し、殺されてしまう。燕を滅ぼした秦王は、やがて天下統一を完成し、始皇帝として中国全土に君臨することになった。易水は燕と趙の国境付近の北岳の東側に描かれている。

秦（左下）と趙（中央）、燕（右上）の拡大図（○印が易水）

６．秦三十六郡并越四郡

秦三十六郡并越四郡

序では「秦三十六郡圖」、図では「秦三十六郡并越四郡」となっている。

Wikipediaによれば、秦については、「秦（紀元前905年～紀元前206年）」は、中国の王朝である。周代・春秋時代・戦国時代にわたって存在し、紀元前221年に史上初めて中国全土を統一、紀元前206年に滅亡した。統一から滅亡までの期間を秦朝、秦代と呼ぶ。統一時の首都は咸陽。」とある。

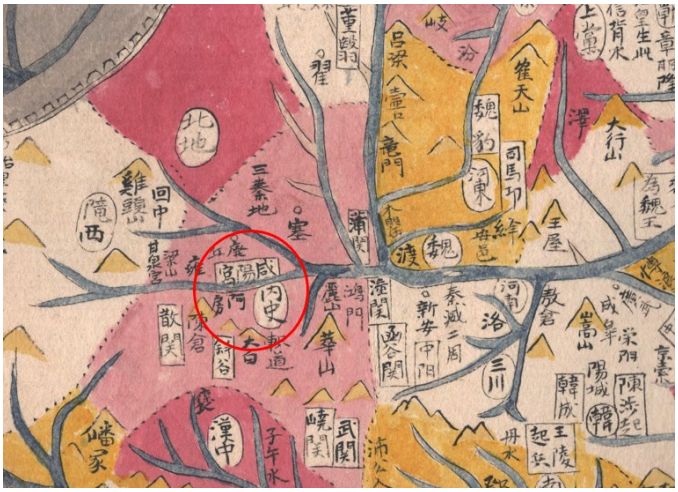
また、秦朝の行政区分については、「紀元前221年、秦国は最後に斉国を滅ぼして、中国史上最初の統一帝国、秦朝を打ち建てた。秦朝最初の皇帝始皇帝は丞相の李斯の建議に基づき、地方の支配を分封制による諸侯を通じての間接的統治から全国一律に単一の郡県を置いて中央集権的に支配する郡県制を導入、全国を36郡に分けた。五嶺の南、南越族を支配した領土には、南海・桂林及び象州の3郡（秦朝滅亡後に南越国となった地域）を、北に匈奴を攻めて陰山以南を切り取った地には九原郡（現在の内モンゴル自治区包頭市南西）を置いた。領土を広げる

ごとに、恒山・済北・膠東・河内・廬江・衡山などの郡を次々に置いた。始皇帝は度量衡・文字の統一、郡県制の実施など様々な改革を行った。また、匈奴などの北方騎馬民族への備えとして、それまでそれぞれの国が独自に作っていた長城を整備し万里の長城を建設、それに加えて阿房宮という増大な宮殿の建築も行った。秦の成立は単なる中国統一と言うことに終わらず、皇帝号の創始・行政区分の確立・万里の長城の建築などの点で中国と呼ばれる存在を確立したという意味で非常に大きい。」とある。

上記の記述では、南海・桂林及び象州の3郡とあるが、本図では越四郡とあり、閩中を含めて◎で示されている。

再び、Wikipediaによれば、始皇帝については、「秦王に即位した後、勢力を拡大し他の諸国を次々と攻め滅ぼして、紀元前221年に中国史上初めて天下統一を果たした。統一後、王の称号から歴史上最初となる新たな称号「皇帝」に改め、その始めとして「始皇帝」と号した。統一前の秦に引き続き法律の厳格な運用を秦国全土・全軍統治の根本とするとともに、従来の配下の一族等に領地を与えて領主が世襲して統治する封建制から、中央政権が任命・派遣する官僚が治める郡県制への地方統治の全国的な転換を行い、中央集権・官僚統治制度の確立を図ったほか、国家単位での貨幣や計量単位の統一、道路整備・交通規則の制定などを行った。万里の長城の整備・増設や、等身大の兵馬俑で知られる秦始皇帝陵の造営といった世界遺産として後世に残ることになった大事業も行った。法家を重用して法による統治を敷き、批判する儒家・方士の弾圧や書物の規制を行った焚書坑儒でも知られる。」とある。

首都には、京師の治にあたる官の意味の内史、咸陽宮や阿房の字が見える。



秦の首都付近拡大図（○印内に咸陽宮、内史、阿房が記載）

７．西漢州郡圖

西漢州郡圖

西漢とは - コトバンク (kotobank.jp)によれば、西漢については、「前漢王朝の別称。漢王朝は紀元8年、王莽（おうもう）によって帝位を奪われて一時中断した。中断以前の漢を前漢というが、都を西の長安（西京）に置いたところから西漢ともよばれる。」とある。

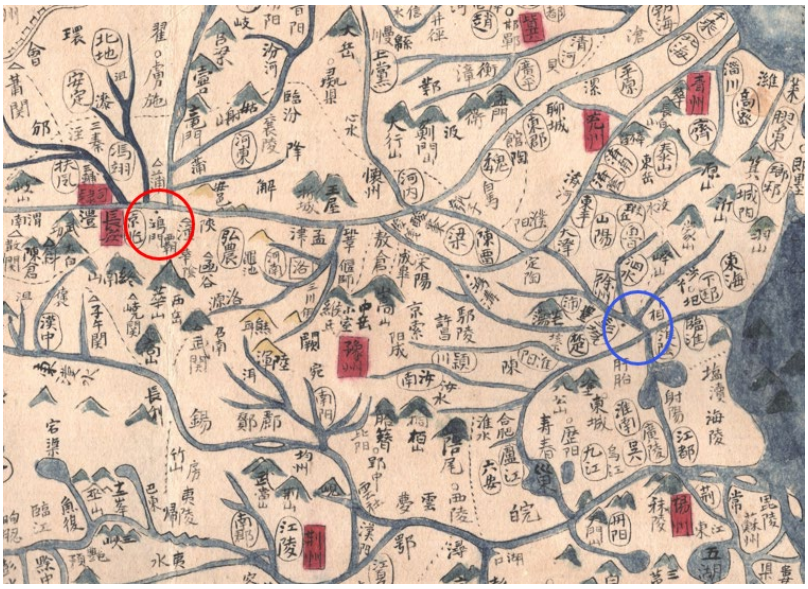
Wikipediaによれば、前漢については、「前漢（紀元前206年～8年）は、中国の王朝である。秦滅亡後の楚漢戦争（項羽との争い）に勝利した劉邦によって建てられ、長安を都とした。

武帝の時に全盛を迎え、その勢力は、北は外蒙古・南はベトナム・東は朝鮮・西は敦煌まで及んだが、孺子嬰の時に重臣の王莽により簒奪され一旦は滅亡した。その後、漢朝の傍系皇族であった劉秀（光武帝）により再興される。前漢に対しこちらを後漢と呼ぶ。

中国においては東の洛陽に都した後漢に対して、西の長安に都したことから西漢と、後漢は東漢と称される。前漢と後漢との社会・文化などには強い連続性があり、その間に明確な区分は難しく、前漢と後漢を併せて両漢と総称されることもある。

漢という固有名詞は、元々は長江の支流である漢水に由来する名称であり、本来は劉邦がその根拠地とした漢中という一地方をさす言葉に過ぎなかったが、劉邦が天下統一し支配が約400年に及んだことから、中国全土・中国人・中国文化そのものを指す言葉になった（例：「漢字」）。」とある。

項羽と劉邦の「鴻門の会」の舞台となった「鴻門」の地が長安の東側に示されているが、「四面楚歌」の言葉が生まれた「垓下の戦い」の「垓下」は書かれていない。



項羽と劉邦の戦い（左側○印は鴻門、右側○印は垓下）

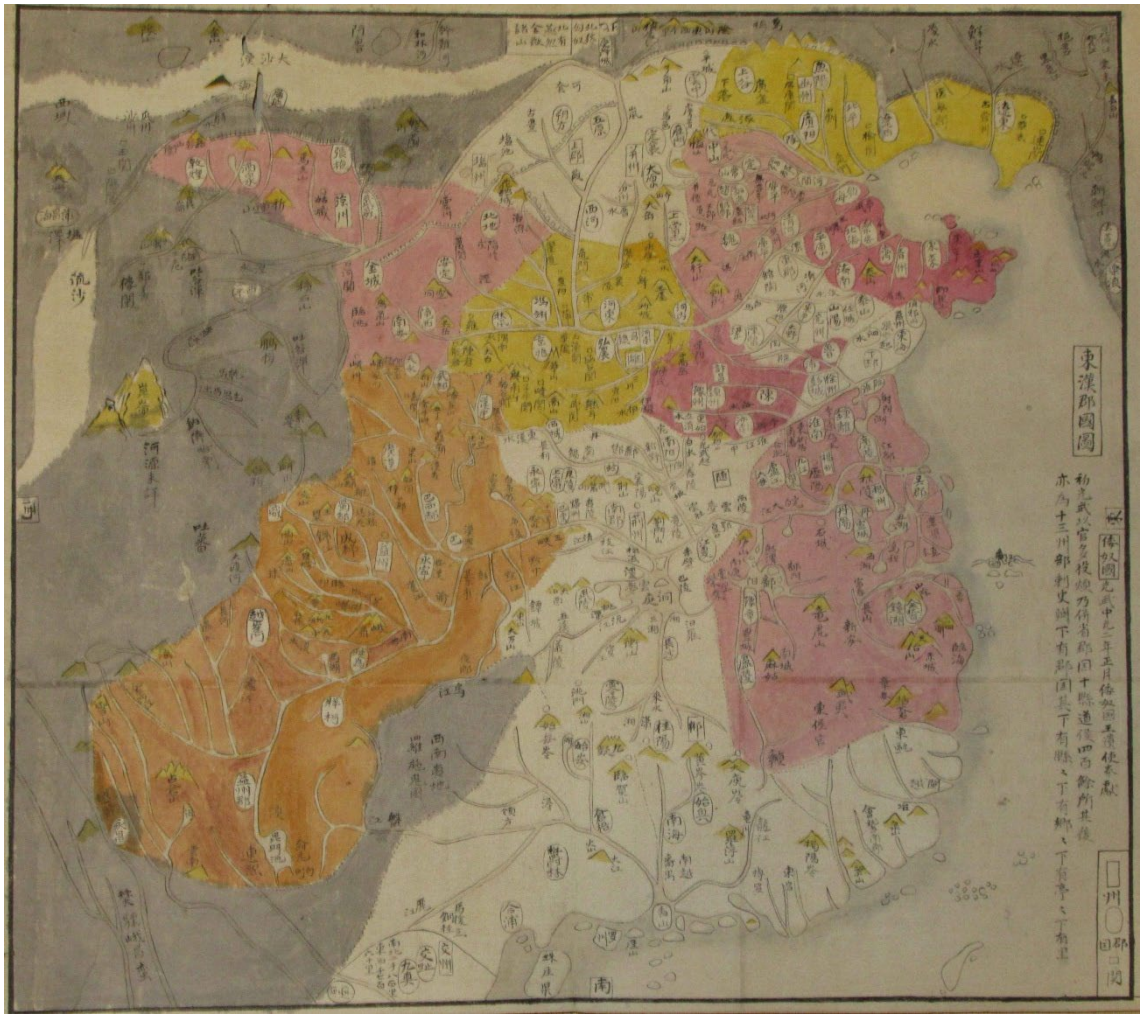
垓下の戦いで漢軍に追い詰められ、形勢利あらずと悟った項羽は別れの宴席を設け、自らの悲憤を詩に読んだ。

力拔山兮　氣蓋世　（力は山を抜き　気は世を蓋う）
時不利兮　騅不逝　（時に利あらず　騅逝かず）
騅不逝兮　可奈何　（騅逝かざるを　奈何すべき）
虞兮虞兮　奈若何　（虞や虞や　汝を奈何せん）

虞は項羽の愛妾で虞美人と呼ばれた。騅は項羽の愛馬である。

司馬遷が「史記」を編纂したのは、武帝の時代である。

８．東漢郡國圖



東漢郡國圖

序では「東漢州郡圖」であるが、図では「東漢郡國圖」となっている。

Wikipediaによれば、後漢については、「高祖・劉邦より前漢は200年以上続いたが、末期には王莽が権勢を握っていた。8年、王莽が自ら皇帝に即位し国号を新と改めたことで前漢は滅亡する。

そして王莽は儒教色の極めて強い政治を行い、土地・奴婢の売買禁止・貨幣の盛んな改鋳などを行った。だがあまりに性急な政策は失敗を重ね、国内は混乱した。

そんな中呂母の乱が勃発し、それを皮切りに全国で反乱が起きた。そして23年には新が滅亡し更始帝が緑林軍に擁立される。そんな中、これに従軍していた劉秀（光武帝）は河北を転戦して力を蓄え、25年には皇帝に即位する。そして赤眉軍を破り降伏させた光武帝は各地の群雄を制圧して周り、36年に統一を果たした。

当時国内は疲弊していたため、光武帝は奴婢の解放や大赦を行い、また地方の常備軍を廃止することで、労働力の増加を図った。さらに徴兵制から屯田兵制へと切り換え、再び五銖銭を発行した。他にも、本来は皇帝への上奏の中継ぎが役目である尚書を重用し、三公ら大臣の権力を奪い皇帝へと集中させた。

そして外交面では、南方では交阯（ベトナム北部）で40年に反乱を起こすも鎮圧する。北方では匈奴が分裂し、南匈奴が後漢に帰順した。この頃倭の奴国の使者に金印を授ける。また儒教を振興し、学制や礼制を整えた。」とある。

前漢・後漢（高祖、武帝、西域経営、匈奴遠征、光武帝、黄巾の乱など）　受験対策問題　20 / 世界史 by レキシントン |マナペディア| (manapedia.jp)によると、後漢については次のようである

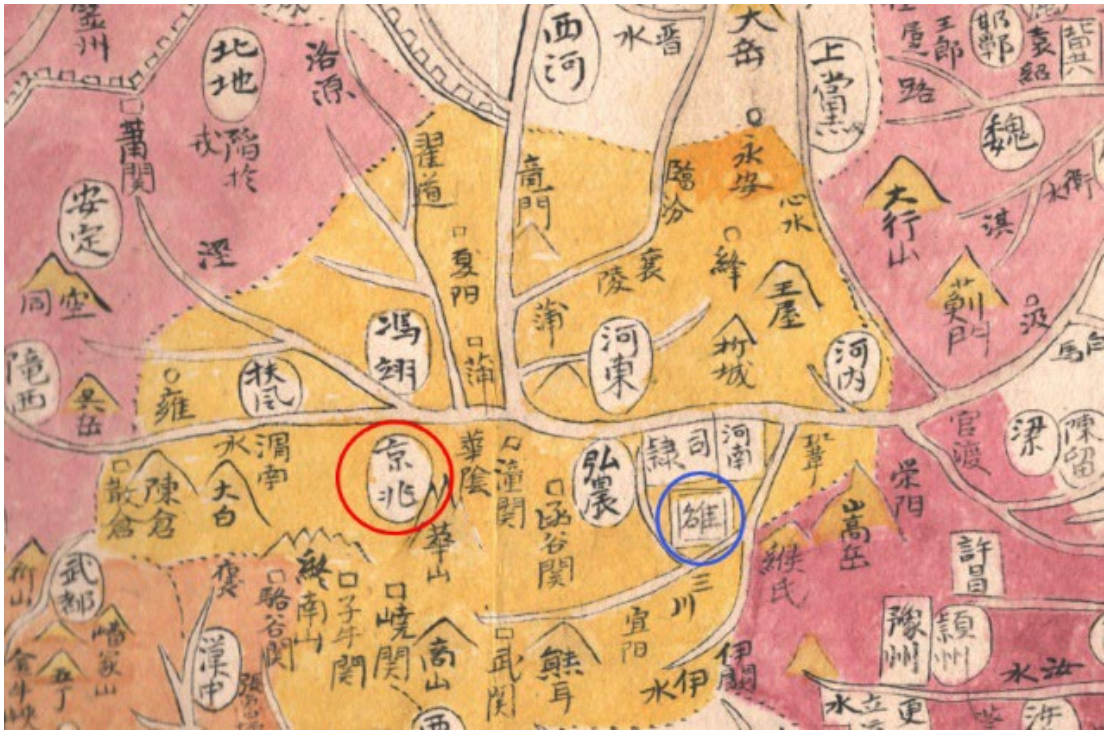
「後漢は2世紀以降幼少の皇帝が相次いで即位し、外戚や宦官が政治の実権を握るようになった。こうした状況の中、儒家を中心とした知識人である党人が宦官に対抗しようとした結果、逆に公職追放にあった党錮の禁という事件が起こった。これ以降、宦官の専横は強まり、中央の政治は混乱し、加えて度重なる飢饉がおこり、農民の反乱が相次いだ。

中国社会が混乱する中、救いを求める人々を信徒にし、太平道や五斗米道など各地に宗教結社が次々と成立していった。この2つの結社は、のちに道教の源流となる。

張角率いる太平道は、紀元前184年に黄巾の乱を起こした。黄巾の乱は大反乱となり、混乱に乗じて各地に有力者がでて、後漢は衰退し、220年、魏によって滅ぼされ、三国時代が始まった。」

この図では長安が京兆となっていて、洛陽の場所に「雒」と書かれている。

Wikipediaによれば、洛陽は「周代では洛邑であったが、後漢の時代、雒陽に改名された。魏の時代に、洛陽に戻される。」とある。



長安（左○印）と洛陽（右○印）付近の拡大図

つづく

The motorcycles which I am loving（1）

河野大輔（H17/2005卒）

1. バイクとの出会い

私がバイクに乗り始めたのは博士課程の学生だった頃、山路技術職員に、「京都はバイクの免許が安く取得できるから、取るだけ取っておいたら？」と勧められたのがきっかけでした。「バイクを買う予定はないが、免許は取ってみるか。」と教習所に通い始めましたが、卒業検定を迎える頃にはXR100モタードを買う気満々になっていました。以来、オフロード・アドベンチャーバイクを好んで乗っています。ブレーキングの慣性力などの物理を直接的に感じつつ、その物理への介入感（操作感）を味わうことができるのが私にとってのバイクの魅力です。

2. XR100モタード（ホンダ）

XR100モタードは私が最初に購入したバイクで、今なお通勤や日常の足として活躍しています。XR250（ホンダ）が格好よかったのですが、予算と維持費を考えて、原付2種のXR100モタードを選びました。結果的にはこの判断は功を奏し、いつでもUターンできる軽さ・サイズと足つきの良さで、気軽な林道チャレンジが可能になりました。今はオイル交換程度ですが、マフラー交換、キャブレター

左　タイガー800XCX
右　XR100 モタード

花背へ抜ける林道にて　2009 年

調整など、改造とメンテナンスの楽しみも味わっているバイクです。2台目のKLX250（カワサキ）と2台体制になったときから、なぜ2台もバイクが必要なのかと聞かれることもしばしばですが、可愛いもので、壊れるまで乗ると思います。壊れたら自力で修理するかな…

3. タイガー800XCX（トライアンフ）

3台目に購入したバイクです。2015年のこと、ADVenture’sというその名のとおりアドベンチャーバイクの雑誌を本屋で見かけ、タイガー800の恰好良さにしびれました。少し角ばった2眼のライトと、パイプフレームとエンジンガードの間にみっちり詰まったエンジンが魅力的でした。しかし、ポンと買えるお金もありませんし、そもそも大型免許を持っていません。2016年に妻が里帰り出産した際にまずは大型免許を取りに行きました。免許取得後、ウキウキ気分でトライアンフ京都に試乗に行き、それまで乗っていた単気筒とは異なる3気筒の滑らかさと、800ccの大型バイクである割には動き出してしまえば軽く感じることに驚きました。しかし、まだお金はありません。「欲しいな～」と思いながら、年刊のADVenture’sを毎年買って眺めながら貯金し、機会を待ちました。

時は流れて2020年秋、貯金は目標額に足りませんが、タイガー900へのフルモデルチェンジを機に、また試乗に行きました。タイガー900は電子装備が充実されて、操作感も悪くなかったのですが、外観には全くしびれませんでした。ふと店内に残っている800を見て、型落ちで安くならないか店員に交渉したところ、トップ＆パニアケースと社外マフラーがついてほぼ本体の値段でよいという回答が！ケースが欲しかった私にとっては数十万円の値引きです。800は既に結構売れて残り僅か4台とのことですが、値引きされても若干貯金が足りなかった＆趣味の品としては値段が高いので悩みました。これを逃すと新車では手に入らないと決心してKLX250を売り（KLX250も可愛がっていたので、これもかなり悩みました…）、購入して今に至っています。准教授への昇任で給料が上がって貯金が加速していた、家を購入して安心してバイクを置ける場所ができた、KLX250が高く売れた、などいくつかのよいタイミングと運がありました。さすがにタイガーで林道に入る勇気はありませんが、亀山～丹後の山道をのんびりと満喫しています。

京都大学機械系工学教室125周年記念誌発行のお知らせ

西脇眞二（S61/1986卒）

昨年、2022年に機械系工学教室は創立125周年を迎えました。1897年6月18日に京都帝国大学が創立され、最初に機械工学3講座を含む合計21講座からなる理工科大学が開設されました。大学と同じくして教室が125周年記念を迎えるのを祝して、教室では記念事業を実施してまいりました。まず、京都大学機械工学系教室125周年記念基金を設立しました。この基金へ京機会の会員の方をはじめ多くの関係者の方からご寄付をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、2022年11月5日には、京都大学船井哲良記念講堂・国際連携ホールにて125周年記念式典を開催しました。さらに、記念事業の一環として、京都大学機械系工学教室125周年記念誌を作成してまいりました。当初予定しておりました2022年内までの発行には少し遅れましたが、ようやく完成しましたので、その概要をご紹介させていただきます。なお、本誌は、京都大学機械工学系教室125 周年記念基金にご寄付をいただいた方に、3月中旬頃に郵送させていただく予定です。

表紙（図１）には、吉田キャンパスの創立時の校舎、その後に立て替えられた新校舎、さらに桂キャンパスの校舎を掲載しております。

図1　京都大学機械系工学教室125周年記念誌の表紙

次に、記念誌の目次を示します。本誌は、以下の構成でまとめております。

目　　次

第1章　教室の沿革
1.1　はじめに

1.2　21世紀COEプログラム「動的機能機械システムの数理モデルと設計論」
（2003年度～2007年度）
1.2.1　拠点形成の目的
1.2.2　取り組まれた研究課題
1.2.3　研究体制と事業推進担当者
1.2.4　シンポジウム活動
1.2.5　教育プログラム
1.2.6　社会連携活動
1.2.7　新しい展開

1.3　機械三専攻改組（2005年）

1.4　大学院講義科目の系統化（2005年）――講義内容・体制の変革について

1.5　桂移転（2013年）
1.5.1　桂キャンパスの全体像
1.5.2　桂キャンパスの機械系教室

1.6　若手研究者等海外派遣プログラム「国際的横断型アカデミア人材育成のための機械系工学教育研究プログラム」（2010年）

1.7　産学連携講座の設置
1.7.1　進化型機械システム技術産学共同講座
1.7.2　デジタル設計生産学寄附講座

1.8　その他

1.8.1　リーディング大学院プログラム（2013年～）

（1）デザイン学大学院連携プログラム（Collaborative Graduate Program in Design）

（2）グローバル生存学大学院連携プログラム（Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies）

（3）　充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム（Training Program of Leaders for Integrated Medical System for Fruitful Health-Longevity Society）

1.8.2　エジプト日本科学技術大学（E-JUST）（2010年～）

1.8.3　ナノテクノロジーハブ拠点（2011年～）

1.8.4　京都大学学生フォーミュラプロジェクト（KART）（2003年～）

1.9　まとめ

第2章　研究室の系譜

第3章　125周年記念に寄せて

第4章　125周年記念式典報告

「第1章　教室の沿革」では、創立101年～125年の間の教室内での事業をまとめました。100年までの沿革について、100周年記念の際に発行された記念誌に詳細が述べられていますので、今回は100周年の後の教室の沿革を、教室において実施された主だった行事をとりあげながら、紹介しました。

「第2章　研究室の系譜」では、図2に示したように、創立101年～125年の間の研究室の系譜を表にまとめたものを掲載しました。101周年以降、改組等があり研究室の変遷がかなり複雑になっておりますので、冊子に綴じ込むことが難しく、付録として裏表紙前に添付しました。このファイルは京機会のホームページにも掲載予定です。

「第3章　125周年記念に寄せて」では、教員の寄稿を掲載しました。本寄稿は

京機短信にてすでに紹介しております。

「第4章　125周年記念式典報告」は2022年11月に開催しました125周年記念式典の報告です。

今回記念誌を送付させていただいた方には図３に示すタンブラーも同封させていただいています。

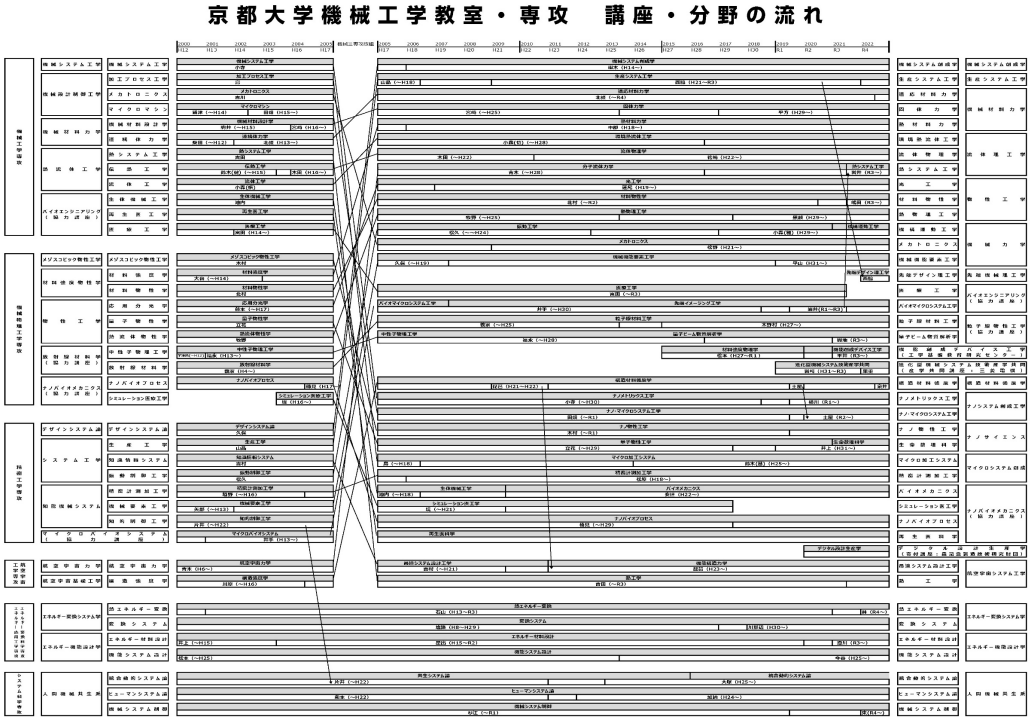


図2　機械系工学教室の研究室の流れ

図3　同封のタンブラー

2022年九州支部秋の行事開催のご報告
～リモートミニ講演会・支部総会・懇親会～

千々木　亨（S54/1979卒）

九州支部では去る12月10日にリモートミニ講演会と支部総会と懇親会を実施し14名の方にご参加頂きましたので報告いたします。会場の料亭にWi-Fiを持ち込んでのリアル＆リモート開催となりました。

まず、黒瀬良一副支部長（1979）に「スーパーコンピュータ「富岳」とものづくり」という演題でご講演頂きました。富岳を用いた最前線の熱物理学工学の研究内容をご紹介頂き脱炭素社会構築の為に今後重要となるエネルギー設備の効率最適化へ向け日々挑戦を続けておられることを再認識しました。質疑応答では将来のエネルギーのあるべき姿にまで議論が及び、京機会らしい講演会となりました。

支部総会では旧年度の事業報告と新年度計画が承認され、下記の2023年度役員を選出しました。

支 部 長	中村久志　（1981）	TOTO（株）
副支部長	黒瀬良一　（1993）	京都大学
事務局長	入船佳津一（1985）	TOTO（株）
事務局次長	長友志朗　（1999）	三菱電機（株）
会　計	清水明　（1971）	元 三菱重工業（株）
監　事	角倉潔　（1990）	かばしま法律事務所

懇親会ではリアルとリモートで情報交換したり、純金鍋で日本酒の試飲に挑戦する等、会員同士で盛り上りました。

ミニ講演会

懇親会

京機短信へのみなさまからのご寄稿をお待ちしています！！

編集人（京機短信編集委員会）
松原　厚（S60/1985卒）
蓮尾昌裕（S61/1986卒）
鈴木基史（S61/1986卒）
西脇眞二（S61/1986卒）
E-mail：tanshingenko@keikikai.jp